第四十六回全国高等学校演劇大会参加作品

滝高等学校

高校羅刹門

作　瀧　源作

連絡先
滝　高　校
〒四八三―八四一八
愛知県江南市東野町米野一番地
電話（〇五八七）五六―二一二七

著作権者連絡先
滝高校演劇部ＯＢ会会長　水谷潤一
〒四八四―〇〇七三
愛知県犬山市天神町五ノ二十五

キャスト（男7人・女6人・先生）

野村主征（かずゆき）
川越崇史（たかし）
杉野貴彦（たかひこ）
加藤大寛（だいかん）
水谷祐紀（みずたに）
土井浩之（どい）
寺尾麻希（まき）
渡邊零美（れみ）
山本真弓（まゆみ）
權田知里（ごんだ）
青井麻里（まり）
平田悠樹（ひらた・委員長）
竹田千紘（ちひろ・副委員長）

先生

・ダークオープン。舞台正面奥には、山台と教卓。教卓の後ろには、先生と千紘が後ろを向いて、立っている。高校生達が並ぶ中、舞台中央では、主征が一人後ろ向きで立っている。

・高校生たちによるダンス。
ダンスの終わりと同時に舞台中央で主征が一人カッターナイフで首を切り、倒れる。

（主征を取り囲み、悲鳴）

・先生と千紘をスポットライトで残しながら、舞台は教室へと転換。椅子を正面に向けて13並べる。

先生　どうしてこんなことが起こったんだ。
千紘　わかりません。みんな好き放題言っていて、収拾がつかないんです。
先生　仕方がない。みんな動揺してるんだ。あんな事故が起こったんだからな。
千紘　事故？　あれが事故だって言い切れるんですか？　もしかしたら崇史が故意にやったことかも・・・。
先生　千紘、先生はみんなの言うことを信じたい。崇史がカッターで主征の首を切ってしまったのは事実だ。問題は、その間に何があったかということなんだ。
千紘　先生。みんなの言っている事は、少しずつ違うんです。
先生　だから、今一度それをはっきりさせるために、俺が直接聞いてみる。
千紘　はい。

・ここまでに場面転換終了。先生と千紘を除いた10人が席に座っている。照明はスネークイン。

先生　いいかおまえ達。昨日の六時間目のホームルーム、先生は資料を持ってくるために少し遅れた。そこへ副委員長の千紘が先生を呼びに来て、俺が教室へ戻ってきたときには、もうすでに主征が血まみれで倒れていた。今、主征は病院に入院している。幸いにも頚動脈までには至らなかったそうだ。崇史と主征に聞いてみたところ、崇史は「プロレスでふざけていて首を切った。」と言っている。そして主征は、「チャンバラでふざけあっていてこうなってしまった。」と言っている。お互い事故だというところは同じだ。だが、どうも俺には腑に落ちないところが、所々出てきている。今、崇史は生徒指導室に呼ばれていて、教頭先生たちと話をしているところだ。今日の一時間目は特別にホームルームとして、担当の先生に代わってもらった。その場にいたお前達なら、大体のことはわかっているはずだ。

千紘　どうしてみんな、黙っているの？　私が先生を呼びに行ってる間に何があったの？　誰に聞いてもみんな少しづつ違うじゃない。人が一人怪我したのよ。ちゃんとはっきりしなさいよ。
先生　千紘、興奮するな。お前達の知ってること、包み隠さず話してもらいたい。
零美　零美、一体何があったんだ。
千紘　あたし、よく見てなかったから、わかりません。
零美　だって、あんたそこにいたんでしょ。
千紘　いい加減なこと言って、人に迷惑がかかったら困るわ。
零美　知ってることを、ちゃんと答えればいいじゃない。
先生　そんな無責任なことは、できません。
土井　確かに、突然のことで驚いているかもしれないが、別に誰かを責めるというわけではなく、事実を知りたいだけだ。それとも、知られてまずいようなことでもあるのか？　土井、どうなんだ。
千紘　いや、先生、僕達ちょっと悪ふざけが過ぎただけなんですよ。
土井　悪ふざけって何よ。
千紘　いや、カッターナイフで遊んでて、たまたま事故につながっちゃっただけなんですよ。
土井　だからその経過を聞いてるんでしょ。
先生　何か・・・、俺も今・・・、よくわからなくて・・・。
真弓　もういい、座れ。
先生　先生。
先生　何だ？
真弓　崇史君や貴彦君が悪いんです。
先生　どういうことだ？
麻希　真弓、あんたは？
真弓　そりゃ、確かに私もその中に入っていたけど・・・。
麻希　しっかり入っていたじゃない。
真弓　でも、私はやってない！

先生　真弓、あれは事故じゃないのか？
真弓　いえ、事故です。
先生　事故なんだな。
真弓　先生、私は関係ありません。
麻希　私も関係ありません。
先生　どうしてその時いっしょにいたお前達が、関係ないと言い切れるんだ。　水谷、お前は見ていただろ。本当のところはどうなんだ？
水谷　僕は、何も見ていません。
千紘　見てないはずがないじゃない。あなた一番後ろの席なんだし、あの時ここにいたんだから。
水谷　でも、僕は何も見ていません。
千紘　先生、やっぱり無理ですよ。みんなちゃんと話す気がないみたいですから。
先生　別に誰かを責めようとしているんじゃない。先生は本当のことが知りたいんだ。これは、二人が両方とも事故だといっているんだから、お前達に責任を負わせるつもりはない。　委員長。
委員長　はい。
先生　お前はクラスの代表として、ちゃんと話すことができるな。
委員長　はい。
先生　こっちへ来い。

・委員長　舞台前中央へ。

先生　昨日、お前達に一体何があったんだ？
委員長　あれは、千紘が先生を呼びに行った後のことでした。

・ピンスポットライトで委員長を残しながら、再現シーンへと場面転換を行う。

委員長　昨日は暑かったので、男子がかき氷を誰におごらせるかということで、じゃんけんをしていました。もちろんその中に崇史も主征も入っていて、教室は笑いの中にも活気付いたものがありました。そのとき僕は、零美と麻希と別の話をしていたんです。

再現シーン（委員長の証言）

・先生と千紘は、舞台奥の台上から再現される光景を見ている。
・舞台中央で、崇史、貴彦、主征がじゃんけんをしている。

崇史貴彦主征　じゃんけんぽん！　あいこでしょ！
真弓　やめなさいよ。
崇史貴彦主征　決まらないよー。
真弓　本当にうるさいわね。
麻希　何やってるのよ、あんたたち。
崇史　じゃんけん！
麻希　それは、わかってるわよ。何のためのじゃんけん？
主征　負けたら氷をおごらなくちゃいけないんだよ。
土井　俺達は、先に勝ったんだ。
大寛　俺は三杯食うぞ！
貴彦　だから負けると大変なんだよ。
麻里　水谷君はどうしたの？
水谷　僕、体弱いから。
零美　どういう意味？
大寛　こいつ、氷食うとすぐ腹壊すんだ。
全員　あはははは・・・。
委員長　待ち給え！　賭け事をすることは、良くないと思う。
真弓　そうよねえ。
麻里　賭け事は不良の始まりよ。
麻希　（俳句調で）高校生、賭け事してまで、食う氷。
委員長　名文だ。
崇史　委員長。
委員長　ん？
崇史　お前も氷食うか？
委員長　名案だ！
四人　（集まりながら）じゃんけん！じゃんけん！・・・
權田　あー、委員長も不良なんだ。
委員長　氷の誘惑には勝てないよ。
全員　あはははは・・・・・。
主征　よし！　じゃんけん行くぞ！
男達　おー！　最初はグー、じゃんけんぽん！

・主征負ける。

土井　主征！
男全員　ごちそうさん！
主征　また負けちゃった。
全員　あはははは・・・・・。
權田　でも、かき氷っておいしそうね。
主征　權田さんも一緒にどう？
權田　えっ？
主征　よかったら、一緒に氷を食べに行かない？
權田　別にいいけど・・・。
麻希　あら、權ちゃんも行きたいの？
麻里　男の子ばかりよ。
土井　みんな一緒に行ったら、楽しいと思うよ。
崇史　もちろん主征のおごりでな。
主征　えっ、僕そんなにお金持っていない。
真弓　何、權ちゃんだけ誘ったの？
零美　あ、いやらしい。
貴彦　え！主征、權田のことが好きなのか？
崇史　ええー、俺知らなかった。
主征　止めてくれよ。恥ずかしいじゃないか。
土井　そうか、かき氷で愛の告白か。
麻里　權ちゃんの幸せ者。
權田　からかわないでよ。主征君、そんなつもりじゃないんだから。
主征　いや、權田さん。
權田　えっ。

・いつのまにか舞台中央で二人向き合っている。それを他の生徒たちが見守っている。

主征　ずっと前から言おうと思っていたんだけど・・・。
權田　何？
主征　僕は、あなたのことが好きです。
權田　急にそんなこと言われても・・・。
主征　あなたのさわやかな笑顔が大好きなんです。
權田　えっ、そんな・・・。
主征　僕と付き合ってくれませんか？
權田　（恥ずかしそうに、好意的な意味を込めて）知らない！
全員　やったー。おめでとう。
崇史　權田、一緒に氷食いに行こうぜ。
貴彦　お前達も、みんな一緒に来いよ。
麻希　こういうおめでたい席だもんね。
真弓　みんなでお祝いしなきゃ。
大寛　じゃあ氷の大盛りで、ケーキカットというのはどう？
委員長　未来の結婚式の予行演習ってとこか？
麻希　でもさ、氷のケーキカットって難しいわよ。
崇史　どうして？
零美　だって、氷が溶けちゃうもん。
全員　あついあついあつい。
崇史　（カッターナイフをポケットから取り出し）じゃん！
主征　何それ？
崇史　氷カット用のカッターナイフ。
主征　えっ！
崇史　俺からの二人に対するささやかな贈り物さ。
主征　そんないいよ。
崇史　とっておけよ。
主征　いらないよ。
崇史　そんなこと言わないでさ。
主征　いらないよ。
崇史　何でだよ。
主征　危ないよ。

・二人がカッターナイフを押し付けあっているうちに、主征の首をカッターナイフで切ってしまう。
・倒れる主征

全員　（悲鳴とともにストップモーション。）

・スポットライトで先生と千紘を残しながら、元の教室へ場面転換。

千紘　先生。これはプロレスともチャンバラとも、何の関係もないじゃないですか！
先生　確かにそうだな。
千紘　大体、みんなでかき氷を食べに行くなんて、信じられません。
先生　どういうことだ？
千紘　こんなに仲のいいクラスなんて、あたし今まで一度も見たことない。主征にしても權ちゃんにしても、いつも自

先生　分で意思表示ができないんです。ましてや、主征が權ちゃんに好きだと言えるなんて、想像ができません。確かにそうだな。主征はクラスの中でどちらかというと無口なほうだからな。それに權田が、みんなにからかわれて笑っていたなんて、俺にも考えられないなあ。

委員長　・ここまでに場面転換終了。照明はスネークイン。

先生　でも先生、僕は自分が見たままを話しただけです。

委員長　わかった、座れ。それじゃあ、崇史が主征にカッターナイフをプレゼントしようとして、起こったことなんだな。

大寛　そうです。

先生　先生。

大寛　なんだ大寛。

先生　（立って）あれは、じゃんけんじゃなくて、お金が・・・・・

大寛　お金がどうしたの？

千紘　いや・・、あの・・、崇史と貴彦がお金を・・・。

麻希　あんた、ちゃんと最後まで話せるの？

大寛　僕は、委員長のは、ちょっと・・・。

貴彦　（立ち上がって大寛に詰め寄りながら）大寛、もう少し頭の中整理してから話せよ。

先生　お金がどうしたんだ、大寛。

大寛　・・・もういいです・・。（座ってしまう。）

千紘　はっきり言いなさい、あんたは。

麻里　（立って）あれはじゃんけんじゃなくて、崇史君と貴彦君がお金を・・・

貴彦　借りたんです。

零美　借りた？

貴彦　借りたんだよ。（麻里を腕で座らせながら）先生、委員長の言ってることは、大体あってると思います。ま、じゃんけんというか、崇史が主征からお金を借りたんです。

千紘　氷を食べるためにお金を借りたの？

貴彦　いや、崇史が欲しい物があるということで・・。

千紘　何？

貴彦　そこまでは俺にもわからない。ただ、借りたお礼というか・・・、みんなが「主征と權田が好き同士なんじゃないか」ということで、二人の仲を取り持つように助けただけなんです。

零美　そうそう。女の子みんなで助けたのよね。

麻希　先生、あのときは珍しく、女の子が一致団結したんですよ。

貴彦　そうだったよな。

土井　千紘、結構みんな仲良かったぞ。

千紘　あんたたちが、主征や權ちゃんの手助けをするなんて、信じられない。

貴彦　信じられようが信じられまいが、事実だからしょうがない。

先生　貴彦。金を借りたことから始まったのは、本当なんだな。

貴彦　・貴彦　舞台前中央へ

貴彦　はい、それは間違いありません。

・ピンスポットライトで貴彦を残しながら、再現シーンへと場面転換を行う。

貴彦　崇史が一生懸命主征に、金を貸してくれと言っていたときに、突然真弓が叫んだんです。

再現シーン（貴彦の証言）

・先生と千紘は、舞台奥の台上から再現される光景を見ている。

真弓　やめなさいよ！

崇史　何を？

真弓　いつもお金を借りることよ。

貴彦　金欠でしょうがないんだよ。

崇史　ごめん。今日だけ、千円。明日返すから。

真弓　みっともないわね。

崇史　じゃあ、お前が貸してくれるか？

真弓　私は嫌よ。

崇史　だろ。主征、ごめん。

主征　いいよ。（千円渡す）

崇史　ありがとう。恩に着るよ。
主征　うん。
崇史　主征、本当に悪いな。
主征　困ってるときはお互い様だよ。
崇史　ありがとな。
真弓　あんたって、本当にお人好しね。
主征　そうかな？
真弓　委員長、お金の貸し借りって良くないよね。
委員長　うん、それは良くないと思う。（舞台中央へ出てきて）
崇史　崇史！
委員長　何だよ。
崇史　僕達高校生の中で、お金の貸し借りは良くないと思う。
委員長　うん、それはわかっている。でも、どうしても今日欲しいものがあってね。主征には悪いと思うけど、他に頼める奴がいなくてさ。
崇史　そういうことしてると、だらけた人間になるぞ。
委員長　そんなことはないよ。
崇史　崇史、いい加減にしろ。
土井　委員長、そんなに怒るなよ。きっと崇史も反省してると思う。
委員長　もう二度としないな。
崇史　わかったよ。
委員長　わかったなら、それでいいよ。
崇史　委員長って本当に恐いからなあ。
真弓　さすが委員長ね。
大寛　だから委員長なんだよ。
委員長　よせよ、大寛。（席に戻る。）
真弓　でも、あんたの親切もいい加減にしなさいよ。
麻希　親切？
真弓　そう、お人好し過ぎるの。
麻希　あんただって、結構親切でお人好しじゃない。
真弓　そう？
零美　ちょっと、おせっかい過ぎるけどね。
真弓　私っておばさんっぽい？
麻里　そんなことないよ。
麻希　あたしは、そこまでできないな。
零美　大丈夫。あんたもできるわよ。
麻希　零美の方ができるわよ。
零美　じゃあ、みんなおばさんってことね。

女子達　あははははは・・・・。
土井　お前達って、本当に仲良いなあ。　主征、みんながお前のこと、気遣ってくれてるんだぞ。
主征　うん、そうだね。
土井　こういう時に、女性に胡麻を擂っておいたほうがいいぞ。
主征　どういうこと？
土井　みんなにお礼を言っといたほうが良いと思う。
主征　うん。（女子達に向かって）みんな、ごめんね。
麻希　やめてよ、もう。
女子達　あははははは・・・。
權田　私、あんたにお礼を言われるようなこと、何も言っていない。
主征　でも、感謝の気持ちだから。
崇史　あれ？　主征、權田に気があるんじゃないの？
主征　やめてくれよ。
麻希　權ちゃんも意識してるから、そんなこと言い出すんだ。
權田　からかわないでよ。
崇史　主征。お前、權田のこと好きなら手伝うぞ。
貴彦　さっき千円借りたしな。
土井　千円のお返しってわけか。
主征　そんなのいいよ。
零美　權ちゃん。あんたも主征のこと好きなんじゃないの。
權田　私、別に・・・。
麻希　好きみたい。
女子達　やだあー。（女子達、盛り上がる）
崇史　よぉし！じゃあ、告白タイムだ！

・崇史と貴彦が、主征と權田を舞台中央へ連れてくる。

土井　主征、男ならはっきりしろよ。
麻希　ほら、權ちゃんも早く何か言いなさいよ。
真弓　本当、じれったいわね。
麻里　無理矢理はやめようよ。
委員長　僕、こういうの見るの、初めてだ。
土井　主征、早く言えよ。
主征　うん・・。
崇史　よし、俺が手伝ってやる。

・崇史が主征の足元へ、貴彦が權田の足元へ座り、二人を代弁する。

崇史　權田さん。僕は、前からあなたのことが好きでした。
貴彦　私も、あなたのことが好きよ。
崇史　こんな僕でもよかったら付き合ってくれますか？
貴彦　ええ、喜んで。
崇史　きっとうまくいきますよ。
貴彦　素敵な恋をしましょうね。
崇史　愛は永遠に不滅です。
全員　おめでとう！（囃したてる）
主征　何か、僕恥ずかしいなあ。
崇史　照れるなよ、主征。この色男！（主征を突く）
麻希　權ちゃん、よかったね。
權田　やめてよ。
女子達　照れてる照れてる・・（囃したてる）
主征　やめてくれよ、もう。崇史、ちょっとやり過ぎだよ。
崇史　（主征の胸ポケットの中にカッターナイフを見つけて）あれ？　何だよ、これ。（カッターを手に取り）これ、お前のか？
主征　うん。
委員長　そういうものを学校に持ってきちゃ、駄目だろ。
大寛　人を傷つけたら危ないよ。
主征　いや、そういうつもりじゃなくて・・。
委員長　じゃ、どういうつもりなんだよ。
崇史　（カッターナイフをいじっていて）痛い！
麻里　どうしたの？
崇史　（大げさに）いてててて・・・・傷つけちゃった。
麻里　大丈夫？
崇史　冗談だよ。
麻里　止めてよ、馬鹿！　そういう悪ふざけはしないの！
崇史　お前、俺のこと心配してくれてるの？
麻里　そんなんじゃないわよ、バカバカしい！（その場を離れる。）
崇史　（追いかけながら）麻里ちゃ～ん。もう一回切っちゃおうかな～。
大寛　（崇史と麻里の間に割って入り）カッターは危ないから止めようよ。
崇史　ふざけてるだけだよ。

大寛　カッターを持っての悪ふざけは、いつか誰かが怪我をする。
崇史　これは主征が持ってきたんだ。
大寛　でも、今使ってるのは君じゃないか！
崇史　わかったよ。　じゃあ主征、返すよ。（カッターを渡そうとする）
主征　うん。
崇史　（差し出したカッターを、主征に取らせないようふざけながら）ほれ！　ほれ、ほれ！　ほれ・・・。
主征　止めてよ、返してよ・・・。

・やがて二人もみあいになる。もみあっているうちに、カッターナイフで主征の首を切ってしまう。
・倒れる主征

全員　（悲鳴とともにストップモーション。）

・スポットライトで先生と千紘を残しながら、元の教室へ場面転換。

先生　金を借りたお返しにと思ってしたことが、あだになってしまったということか。
千紘　おかしいです。主征にお金を借りるのに、崇史や貴彦が下手に出て頼む必要なんて、無いはずです。
先生　何？
千紘　いつもの二人なら、無理矢理取ることもできたはずです。それにみんなが団結して、善意から權ちゃんと主征の仲を取り持つなんて、絶対にありえない。
先生　でも、それはみんなが好意ということでもって・・・。
千紘　先生。このクラスの女の子は、お互いを誉めあうなんてことはありません。どちらかというと、悪口ばかり言っている。

・ここまでに場面転換終了。照明はスネークイン。

麻希　仲良くするときだってあるのよ。
真弓　いつそんなことがあったのかしらね。
貴彦　お前がいつも、問題を起こしているんじゃないのか？
真弓　どうしてあたしになるのよ。

貴彦　お前のおばさんくささで、いつも揉め事がおこるんだろうが。
真弓　責任転嫁しないでよ。
麻希　そう言えばさ、真弓が委員長に、「さすが委員長ね。」なんて言うわけないじゃない。
零美　大体、崇史が委員長を怖がって言うこと聞くなんて、ありえない。
委員長　僕は・・・、僕は・・・。
麻希　あー怖い怖い、本当に怖い。
千紘　麻希、いい加減にしなさいよ。
麻希　はいはい。委員長より副委員長の千紘のほうが、よっぽど怖いんだから。
千紘　麻希！
先生　わかったわかった。しかし委員長の話と、今の話とでは、金を借りたということ以外にも、何か腑に落ちない点がありすぎるなあ。一体カッターは、崇史のものなのか、それとも主征のものなのか・・・
貴彦　カッターは主征のです。崇史は大寛に注意されたから、素直にそれを返そうとしただけなんですよ。
零美　素直に？
貴彦　言葉が適切かどうかわかんないけど、返そうとしたのは事実だよ。
先生　權田、どうなんだ？
權田　私、よくわかりません。
千紘　權ちゃん、あんたも当事者の一人なんだよ。主征とのことで、あんたも被害を受けた一人じゃないの？
權田　私、わからない。
千紘　あんた、本当は、またみんなにいじめられたんじゃないの？
麻希　またってどういう意味よ。
千紘　あんたたちが、いつもやってることよ。
零美　あんたたちって、私も入ってるの？
千紘　そうよ。
麻希　何を？・・いつ？・・どこで？　どうしたって言うのよ？
千紘　私は知ってるのよ。
零美　じゃあ、あんたいつも見てたって言うわけ。
千紘　そうよ。
真弓　だったら、何であんたそのとき注意しないのよ。

千紘　それは・・・、いつか先生に言おうと思っていたのよ。
麻希　そんなことがあったんだったら、あんたすぐに先生に言えばいいじゃないのよ。口先ばかりの正義感ね。
零美　やっぱり副委員長だからさ、きちんと報告書にしてまとめて提出しなくちゃと思ったんじゃないの？
土井　副委員長いじめるのは、よそうよ。彼女だって一生懸命なんだから。
貴彦　土井。千紘は、この件には関係ないから、好き勝手に言えるんじゃないのか。
麻希　千紘、あんた気持ちいいでしょ。まるで裁判官みたいで。
千紘　私はそういうつもりで言ってるんじゃない。
真弓　あーやだやだ、こういう雰囲気って。なんか私達悪者じゃない。
千紘　こういうことになってしまった原因は、誰も止められなかった、あんた達全員の責任よ。
貴彦　いい加減にしろよ。
麻希　あんた、何様のつもりで言ってるのよ。
零美　その場にいなかったからといって、日ごろの鬱憤晴らしを、ここでしないでよね。
真弓　大体、何であんたがそこに立ってるのよ！
麻里　やめてよ！　何でみんなこんな風になっちゃうのよ。
千紘　みんなが本当のこと言わないからよ。
麻希　言ってるわよ。あんたが疑ってそれを信じないだけじゃない。
土井　落ち着こうぜ。みんな、自分に都合の良いことばっかり言ったら、おかしいよ。
大寛　土井君、君もそうじゃないのか。
土井　よせよ・・大寛・・そういうこと言うのは。なんか俺、誤解受けるじゃないか。
真弓　あんたもたまにはいいこと言うじゃない。
先生　わかったわかった。　じゃあ麻里。
麻里　はい。
先生　お前の目から見た事の真相を、俺に話してくれないか？
麻里　でも・・、私・・。間違ってるかもしれないし・・。
千紘　先生、麻里だったら嘘はないと思います。　麻里、話してみて。
麻里　これ以上私が話すと、クラスのみんなが目茶目茶になるような気がして・・・

先生　麻里、心配するな。お前が見たこと感じたこと、そのままでいいから。昨日何が起こったか、お前の口から聞いてみたい。

麻里　はい。

・麻里　舞台前中央へ。

・ピンスポットライトで麻里を残しながら、再現シーンへと場面転換を行う。

麻里　昨日先生が遅かったので、千紘が先生を呼びに行きました。でも5分待っても、先生と千紘は教室に来なかったんです。みんなは、勝手におしゃべりをしたりして、遊び始めていたんです。崇史君と貴彦君は、いつものように主征君のお金をたかっていました。

再現シーン（麻里の証言）

・先生と千紘は、舞台奥の台上から再現される光景を見ている。

真弓　やめなさいよ！

崇史　何を？

真弓　お金をたかることよ。

貴彦　いつもの集金だよ。

麻里　どうしてあなた達が、集金しなきゃいけないのよ。

崇史　いいじゃねえかよ、主征がくれるって言ってんだよ。

大寛　無理矢理取ってるだけなんじゃないのか。

貴彦　お前は黙ってろ！

土井　「恵まれない子に愛の手を」ってところじゃないの。

麻希　恵まれない子って誰のこと？

崇史貴彦　（手を挙げて）はい。

零美　確かにその通りね。

真弓　でも、主征は嫌がってるじゃない。

崇史　主征はボランティアに貢献してるんだよ。

貴彦　それだけ情けが深いってことだよ。

崇史　主征の愛は、ちゃんと受け取らなきゃ。

真弓　都合の良いこといって、お金を盗んでるだけじゃない。

土井　自分で渡してるんだから、泥棒じゃないよ。

麻里　主征、あんたそれでいいの？

主征　ん？　僕は・・・

崇史　これでいいんだよな。

主征　・・うん。

貴彦　ほら見ろ。お前達は関係ない、引っ込んでろ！

真弓　委員長、あんた何か言ってやりなさいよ。

委員長　崇史、貴彦！　僕の思うところには・・・・。

崇史　やかましい！

委員長　・・・と思うよ・・。

真弓　情けないわねぇ。

零美　真弓、あんた関係ないんだからさ。ちょっとうるさい。

麻希　本当、人のお節介ばかり焼いているよね。自分では何もできないくせに。

真弓　あんた達は、これ見て何も思わないの？

麻希零美　関係ないもんねー。

真弓　（崇史と貴彦を見て）あんた達のやってることは、立派な犯罪よ。

崇史　犯罪か？

貴彦崇史　さあ？

大寛　犯罪だと思うけど。

貴彦　やかましい！

麻希　嫌だったら、主征が自分で言いなさいよ。

主征　えっ？　・・はい。（お金を出す。）

崇史　（お金を手に取り）ということだよ。土井、今日氷おごってやるよ。

土井　ごちそうさん。

真弓　あんたって、最低ね。

主征　何で？

真弓　人がこんなに親切にしてやってるのに。

麻希　親切？

真弓　そうよ。

零美　自己満足ね。

麻希　ただのおばさんじゃない。

真弓　何であたしがおばさんなのよ？

大寛　いや、それはそうじゃなくて・・、親切と自己満足とは

麻希零美真弓　正義の中において・・・。

水谷　うるさい！

大寛　大寛、黙っていた方がいいよ。

主征　でも僕は、主征のためにも良くないと思うんだ。

大寛　大寛君。でも、君は何もできないよ。

大寛　・・うん・・。
真弓　あーやだやだ、こんなクラス。
零美　あーやだやだ、こんな人。
真弓　誰のことよ？
零美　さあ、誰でしょう？
麻希　あたしじゃない？
麻里　どうしてあんたのことになるのよ？
麻希　（各人にあてつけがましく）だって、あたしって口うるさくておばさんくさいし、正義感いっぱいのかわい娘ぶりっ娘、暗くて、言ってることとやってることちゃらんぽらんだし、いつもおどおどしてる。あたしって最低。
零美　大丈夫、あなた以上の人はもっといるわ。
麻希　そう？全然気づかなかった。
委員長　そういう嫌味を言うのは止めようよ。
麻希　あっそうそう、嫌味っぽいのも忘れてた。
土井　こわいなあ、女の戦いって。
崇史　委員長。何とかしろよ、この女達。
零美　この女達って何よ。
麻希　ひどいよね。
委員長　僕は・・、何も・・、別に・・・。
土井　主征、お前のせいだよ。
主征　えっ、僕？
土井　お前が早くはっきりしていれば、こんなことにならなかったのに。
主征　そうかな？
土井　そうだよ。
貴彦　主征、みんなに謝れよ。
真弓　あんたがはっきりしないから、いけないのよ。
主征　・・ごめんなさい・・・。
崇史　お前、本当にすまないと思ってんだな。
主征　うん。
崇史　だったら、女連中皆に謝ってこいよ。
土井　悪いことしたら、謝らないとな。
主征　うん。
崇史　ほら、行けよ。
主征　（クラスの女子達に、一人ずつ順に謝って行く。）
麻里　（主征に謝られて）どうして謝るのよ。
主征　いや、僕が悪かったから。
麻里　何であんたが悪いのよ。

権田　私、あんたに謝られるようなこと、何もない。
崇史　ついでだよ、ついで。
土井　ついではかわいそうだな。
麻希　でもさ、權ちゃんいつもついでじゃない。女子の中のおまけ。
麻里　そういう言い方って、良くないと思う。
零美　あら、もうひとつのおまけが出てきた。
真弓　いい加減にしなさいよ、あんた達。
權田　あたしは、ついでもおまけでもない。
崇史　だったら、何で主征がおまえの所へ謝りに行ったんだよ。
貴彦　主征、權田のことが好きなんじゃないのか？
崇史　あっそうか。だから謝りに行ったんだ。
土井　謝るついでに、愛を育むってか。
零美　熱いとこ見せつけられちゃったわね。
麻希　あー熱い熱い、ごちそうさま。
崇史　だったらよ、ここで愛の告白やろうぜ。
貴彦土井　そうだよな。
真弓　やめなさいよ。

・貴彦は、權田を舞台中央へ連れてくる。崇史は、主征を權田と向かい合わせにして、羽交い締めにする。操り人形のように二人を扱う崇史と貴彦。

崇史　權田さん、僕はずっと前から、あなたのことが好きでした。
貴彦　え、私もあなたの暗い性格が好きよ。
崇史　僕は、あなたの陰惨な顔に魅かれています。
貴彦　私も、あなたの何でも言うことを聞くところがたまらないわ。
崇史　僕達、気が合いますね。
貴彦　素敵な恋をしましょうね。
崇史　愛は永遠に不滅だ。
崇史貴彦他　あはははは・・。
主征　やめてくれよ。
崇史　照れるなよ、色男。（主征を蹴る。）

・主征は、崇史に蹴られて四つんばいになる。このとき、主征のポケットからカッターナイフが落ちるが、

全員まだ気づいていない。

麻希　どうしたの、主征。
貴彦　今度は土下座して結婚でも頼むのか？
零美　權ちゃんも相当惚れられたみたいね。
主征　もういい加減にしてくれよ。（立ち上がる。）
權田　あんたのせいで、あたしまで迷惑する。
麻希　あーあ、權ちゃんにまで振られちゃった。
崇史　（落ちているカッターナイフに気づいて）あれ？何だよ、これ。（カッターナイフを拾って）これ、お前のか？
主征　うん・・。
貴彦　こういうものを学校に持ってきちゃ、駄目だろ。
崇史　（カッターで主征を甚振りながら）こういうことして、人が傷ついたら、どうするの。
主征　いや・・そういうつもりじゃなくて・・。
崇史　じゃあ、どういうつもりだよ。怪我したら危ないでしょ。
委員長　崇史君、そういう危ないこと止めようよ。
崇史　危ないから、こいつに教えてやってんだよ。
大寛　君がやってることも、危ないよ。
崇史　身をもって教えてるだけだ。なあ、主征。
麻里　止めなさいよ。主征君をいつもいつもいじめるのは。
真弓　何で彼ばっかりいじめるの？
崇史　いじめてねえよ、遊んでるだけだよ。
麻里　もうやめなさいよ。
崇史　だったらよ、麻里。お前が遊んでくれるか。（麻里の髪をつかみながら、カッターナイフをちらつかせる。）
麻里　キャー。（見せ付けられたカッターナイフを払いのけ、逃げる。）
崇史　（麻里を追いかけながら）おい、どこ行くんだよ、遊んでくれよ。
大寛　（崇史の行く手を阻み）カッターは危ないから、止めようよ。
崇史　正しい使い方のお勉強だよ。
大寛　人に刃を向けるのは、危ないよ。
崇史　危ないか危なくないか、お前の体で試してみるか？
大寛　（椅子を振り上げて）いい加減にしろ！
崇史　（後ろに下がって）・・・わかったよ、止めるよ。やめりゃあいいんだろ。
・大寛と崇史、二人離れるが・・・
崇史　このやろう！（大寛に向かって行く。）
・主征が、崇史の行く手を阻む。カッターを持つ崇史の手を押さえ、組み合いとなる。
崇史　何だよ、主征。
主征　崇史君、止めなよ。
崇史　でしゃばるな！
主征　もう止めようよ。
崇史　放せ、主征！
・二人組み合っているが、やがて主征の首をカッターナイフで、切ってしまう。
全員　・倒れる主征
（悲鳴とともにストップモーション。）
・スポットライトで先生と千紘を残しながら、元の教室へ場面転換。
千紘　やっぱり。崇史は主征からお金を借りたんじゃなくて、たかっていたんです。
先生　崇史や貴彦は、前々から主征をいじめていたということか？
千紘　そうです。いつか先生にお話ししようと思っていたんですけれど、お金ばかりじゃなく、水をかけられたり靴を隠されたり、窓から荷物を投げ捨てられたり、数え上げたら切りが無いほどのいじめを、いつも受けていたんです。
先生　權田もそうなのか？
千紘　はい。彼女何をされても、いつも黙っていますから、それが格好の的になったと思います。
先生　でも、みんなとしては、ただ単にふざけあってというか・・・。

千紘　これはいじめなんです。ふざけるのといじめるのと、大きく違うんです。先生、もっとしっかり見てください。

・ここまでに場面転換終了。照明はスネークイン。

土井　先生。千紘は物事を大げさにしすぎですよ。確かに僕らもふざけすぎたのかもしれませんけど、別に悪意があってのことではありません。

麻希　千紘は、物事を悪いほうへ悪いほうへ考える性格だからね。

貴彦　千紘、何先生をあおってるんだよ。

零美　まじめだけが取り柄の性格じゃあ、それも仕方ないよねえ。

千紘　あんたたち、何を自分達を正当化しようとしているのよ。麻里が言っていることから考えれば、あんた達がやっているのは、いじめ以外の何物でもないじゃない。

麻希　麻里は自分にとって、都合のいいことばかり言ってるのよ。大体大寛が崇史にあんなに強い態度に出られるわけないじゃない。何よ、いい子ぶりっ子して。嘘ばっかりじゃない。

千紘　嘘つきは、あんたの特権でしょ。

麻希　あんた、いい加減にしなさいよ。私一人を悪者にしようということ。

麻里　先生。だからいやだったんです。こういう風になるの、わかっていたから・・・（泣いてしまう。）

真弓　泣くの止めなさいよ、麻里。

零美　すぐ泣けばいいと思ってる。

貴彦　泣くのは女の特権か。

土井　女って、何でいつもこうなっちゃうんだろ。先生がさっきから言ってるだろ。誰かを責めようということじゃないんだって。個人攻撃は止めようよ。

千紘　でも麻希や零美の言うことなんて、信用できない。

麻希　千紘、あんた私達にけんか売ってるの！

零美　じゃ、あんたは何だって言うの。

千紘　いや、私は副委員長として・・・。

先生　止めろ！　もういい、わかった。お前達の言ってることに多少の食い違いがあったにせよ、あれはやはり事故であるということに、間違いはなさそうだ。そこのところは、先生も納得することができた。しかし、普段のお前達がこんな風だったとはなあ。

土井　先生。問題は事故であったかどうかということなんですよね。

先生　ああ、そうだ。

土井　だったら、もうこれでいいんじゃないですか。これ以上続けると、麻里が言うようにこのクラス、バラバラになっちゃいますよ。

・崇史が教室に入ってくる。

千紘　崇史。

貴彦　崇史、どうだったんだ？

崇史　どうもこうも、あれは事故だったんだから、それを説明してきただけだよ。

先生　教頭先生たちは、事故だということで納得してくれたか？

崇史　どういう意味ですか。先生はあれが事故じゃなくて、僕が故意にやったとでもいうのですか。

先生　いや、そうは思っていない。

崇史　貴彦。今これ何やってたんだ？

土井　事情聴取だよ。事故か事故でなかったのかという。

零美　犯人扱いされていたのよ、あたし達。

麻希　裁判長気取りの千紘のおかげでね。

真弓　おかげで授業もつぶれちゃった。

千紘　何言ってるのよ。先生がこういったことをはっきりさせたいと言って、時間を作ってくれたんじゃない。

麻希　あーあ、とんだとばっちりだわ。

崇史　それで、どうなったんですか？

先生　うん。言ってることに多少の食い違いがあったが、あれは事故だということで、先生も理解した。

崇史　あたりまえですよ。あれは事故ですよ。主征が俺から無理にカッターナイフを取り上げようとさえしなければ、あんなことは起こらなかったんだ。

千紘　でも崇史、事故であったとしても、そうなってしまった原因というのは、あんたにあるんじゃないの？

崇史　俺？　俺にあるの？　勘弁してくれよ。みんなでやったことじゃないの。（みんなの崇史に対する目線に気付き）いや、みんなでやったというよりも、そうなってしまっただけのことだろ。

千紘　でも、みんなには責任の自覚が無い。
貴彦　いやそういうことじゃなくて、みんなが崇史にそうさせてしまったということだよ。
崇史　ちょっと待てよ。それなら原因はやっぱり俺にあるってことじゃないか。
貴彦　俺はそんなつもりで言ったんじゃなくて・・・。
崇史　貴彦、お前も俺と一緒にやったじゃないか！
貴彦　いや、俺は・・・。
土井　崇史、もうちょっと落ち着いたらどうだ。
崇史　土井、お前だって俺や貴彦が取った千円で、氷をおごってくれって言ったじゃないか。だったらお前も共犯だろ！
麻希　うるさいなあもう。
崇史　うるさい？　そうか、うるさいか。麻希、他人事みたいな顔するの、止めてくれよ。主征や權田にちょこちょこちょっかい出したの、お前と零美だろ。俺が原因なら、お前達だって同じだろうが。土井も、あっちいい顔こっちいい顔するんじゃないよ。
土井　だったら、カッターナイフを振り回して遊んだの、誰だよ。お前と主征だろうが。
崇史　主征が持ってきたカッターナイフでふざけたのは、確かに俺だよ。でも周りでいっしょにふざけたり、囃子立てたのは、お前達みんなじゃないか！　それで事故が起きた。もし俺が責められるなら、お前達も同罪だ！
零美　勘弁してよ、あたしは何もしていない。
委員長　僕も何もしていない。だから僕には責任が無い。
崇史　そうだよな、お前達、何もしなかったよなあ。責任転嫁ばっかりで、いつもその場から逃げようとする。でもこうなってしまった以上、何もしていないってことは、罪じゃないのか？
委員長　いや・・、それは・・・。
崇史　どうなんだよ！
土井　崇史、俺個人としてみれば、お前がしてしまったことは、どうしようもないと思う。だけど、前々からのお前の主征に対する行動を考えてみれば、今回の事に関しては、やっぱりお前が一番悪いと思う。
崇史　何言ってるんだよ。
真弓　あんたが、日頃から主征に金をたかったり、いじめたりしていたことが、そもそも間違いなのよ。

麻希　あんたみたいのがこのクラスにいたことが、すべての始まりね。
零美　私、学校生活って、もっと楽しいと思っていた。
貴彦　崇史、やっぱりやり過ぎだよ。
土井　どうやって考えてみても、お前が一番の原因だと思うぞ。　なあ大寛、お前もそう思うだろ。
大寛　・・うん、そう思う。
麻希　崇史、主征に悪いと思っていないの？
崇史　いい加減にしろよ！　じゃあ何か、俺がこのクラスにいたことが、そもそもの間違いなのか。
零美　そうとしか考えられないわね。
崇史　いないほうがいいって言うのか！
土井　そういうことになるな。
貴彦　崇史、・・・お前、出ていけよ。
崇史　何？
貴彦　お前、この学校から出ていけ！
崇史　・・・・・・。わかったよ、止めるよ。やめりゃあいいんだろ。止めてやるよ。俺がいなくなればこのクラスはみんな仲良くやって行けるんだ。俺一人が、お前達の責任を背負って行けば、すべてが丸く収まるって言うことなんだろ。
先生　崇史、落ち着け。
崇史　先生、俺、学校辞めます。
千紘　崇史。
崇史　やかましい！お前だって、みんなと同じじゃないか！善人ぶって何でも人に押し付けるし、・・・。
大寛　それは違うと思う。
崇史　（大寛を指差し）度胸も無いくせに、口だけ挟む奴もいるしよ。お前らみんな自分にとって都合の良い子だよ。こんなクラス、反吐が出る。ありがとう、いろんなことを教えてくれて。最高のクラスだったよ。
先生　崇史！
崇史　先生、どうもお世話になりました。さようなら。
麻里　・崇史は教室を出て行ってしまう。
土井　・チャイムが鳴る。
先生、崇史君追いかけなくて、いいんですか。なんなら僕が、崇史呼び戻してきましょうか？

麻希　偽善者。
土井　何だよ、その言い方。
零美　あんたさっき、先生が言っていたように、個人を責めるべきではないって言っていたじゃない。それが何よ。崇史一人に罪なすりつけて。
麻希　それが「呼び戻してきましょうか？」だって。あんた、頭どうかしてるんじゃないの？
土井　あの場合は、ああ言うしか仕方ないだろ。
麻希　あんたの言ってること、わかんないわよ！
貴彦　いや、土井は感情的になっている崇史を見て、もう一回冷静に話し合おうとしただけだよ。
大寛　貴彦君、君も出て行ったほうがいいと思う。
貴彦　何言ってるんだよ、大寛。
真弓　そうよね。崇史が学校辞めるんだったら、貴彦も一緒に辞めていけばいいじゃない。いつも崇史と同じ行動してたんだから。
零美　まるで金魚の糞みたいにね。
麻希　こうなったらさあ、いっそみんなで学校辞めるべきよ。責任とって。
零美　そうよね。そのほうがすっきりするわ。どうせろくでもないクラスだから。
麻希　土井、一緒に辞めようよ。
土井　俺は辞める気ないよ。
麻希　あんたが辞めなきゃ、話にならないでしょ。でなかったら、またこういうことが起こるとき、必ずあんたもいると思うから。
土井　勝手に決め付けるなよ、麻希。
麻里　でも、それで話が終わるわけじゃない。先生、私やっぱり崇史君、連れ戻してきます。
先生　麻里。
麻里　でも・・・。
先生　いや、今日帰りに、崇史の家寄ってみるよ。心配するな。　話はこれくらいにしよう。ちょうどチャイムも鳴ってしまったし。
委員長　先生、これで終わりにしていいんですか？
先生　これ以上話しても、埒があかないだろうし、それに事故だということは、みんなの話を聞いてよくわかった。もう、これでいい。　千紘、次の授業なんだ？
千紘　次は、化学で教室移動です。
先生　よしみんな、移動だから、遅れないように早く行きなさい。
全員　（バラバラで）はい。
先生　委員長、号令。
委員長　起立！　礼！
・皆教室から去る。先生と千紘、そして權田と水谷が残っている。
千紘　先生。崇史、大丈夫でしょうか？
先生　事故とはいえ、少しの間謹慎処分にはなると思う。
千紘　謹慎ですか・・。
先生　うん。学校側としても、事故であってよかったと思う。
千紘　そうなんですか。
先生　傷害にでもなったら、警察沙汰になってしまうからな。もしそうなったら、クラスのみんなが事情聴取を受けて、それこそ大騒動になるだろう。
千紘　でも、物事ははっきりしたほうがいいと思います。
先生　千紘。これは事故なんだ。不幸中の幸いというか、主征は軽傷で済んだ。それがせめてもの救いだろう。
千紘　でも先生、あのカッターナイフ、主征は何のために持っていたんでしょう？
・水谷が席を立って、教室を出て行こうとする。
權田　（呼び止めて）水谷君。あのカッターナイフ、水谷君のだったよね。
水谷　・・・・・。
權田　昨日の朝、主征君にあげたんだよね。
千紘　あのカッターナイフ、あんたのなの？
先生　水谷、そうなのか？
千紘　何黙ってるのよ。
先生　水谷、もう一度聞くぞ。あのカッターナイフは、昨日の朝、お前が主征にやったものなのか？
水谷　はい。僕が主征君にあげたものです。
千紘　どうして？
水谷　言いたくありません。
權田　先生、私見てたんです。水谷君が、主征君にカッターナイフをあげるところを。

先生　水谷、どうして黙っていたんだ。
水谷　この事件と、何の関係も無いと思ったから。
千紘　どうして関係ないと思ったのよ。事件は、そのカッターナイフで起こったことなのよ。
水谷　でも、僕から主征君に渡った時点で、もう僕とは何の関係もありませんから。
千紘　無責任よ。
水谷　無責任って言われても・・。
權田　先生。水谷君、「このカッターナイフを持っていれば、君も強くなれる。」と言って渡したんです。
千紘　強くなれる？
權田　朝早く教室にきたとき、もうすでに水谷君と主征君がいました。私は二人が話をしてるのを見て、珍しいなと思って、思わず聞き耳を立ててしまったんです。そしたら
水谷　水谷君が・・・・・。權田さん、もういいよ。君がこれ以上話すと、また食い違いが生じて、話がややこしくなるかもしれない。先生。僕、昨日の朝あったこと、すべて話しますから。
先生　話してくれるんだな。
水谷　はい。
先生　權田、お前は先に行っていいぞ。
權田　はい・・・。あんた本当のこと話せる？
水谷　うん・・、多分・・。

・權田、去る。

先生　水谷、聞かせてくれるか？
水谷　はい。（舞台前中央へ）　僕が主征君にカッターナイフをあげたのは、彼が強くなれると思ったからです。
千紘　強く？

・先生と千紘にはスポットライトが、水谷にはピンスポットライトが当たっている。

水谷　僕は中学の時、ずっといじめられていました。そのいじめに耐えられなくて、あるときカッターナイフを買って、ポケットに入れておきました。ポケットにあるということで、なぜか安心できたんです。それを見て、いつもいじめる奴らが、だんだん僕に手を出さなくなってきたんです。僕が何をするのか、恐怖に思えたのでしょう。すると、いつしか僕にも、カッターナイフを持っていることで、自信がついてきたんです。それをずっと高校に入ってからも持ってきていました。いつもいじめられている主征君を見て、彼もカッターナイフを持てば、強くなれると信じて、昨日の朝、渡しました。
千紘　主征は、素直にそれを受け取ったの？
水谷　少しためらっていたようだけど、受け取ってくれた。
先生　そうか・・・・。

・再現シーンへと場面転換が行われていく。

水谷　先生、みんな嘘つきです・・・。みんな自分を守るように言っていて、何でもかんでも人のせいにして・・・、みんな嘘つきです。
先生　水谷、じゃあお前は、すべてを見ていたんだな。見ていたことを話せるんだな。
水谷　・・・先生、一番の嘘つきは、主征です。
千紘　何で主征が嘘つきになるのよ。
水谷　僕、見ました。
千紘　何を？
水谷　あいつ、崇史ともみあいになって、カッターナイフがあいつの首にあたったとき、あいつ・・・主征、笑いながら自分の首を切っていったんです。
先生　何？
水谷　先生、あいつ自分で自分の首を・・・・、自分の首を、切っていったんです。

再現シーン（水谷の証言）

・先生と千紘は、舞台奥の台上から再現される光景を見ている。

真弓　やめなさいよ。
崇史　何を。
真弓　お金をたかることよ。
貴彦　たかって何が悪いんだ。
真弓　何で主征たかるのよ。
崇史　主征だからだよ。
真弓　どういうことよ。

崇史　こいつは俺たちにたかられるために、この学校来てるの。
真弓　馬鹿なことといわないでよ。
崇史　真弓、たかるのも、たかられるのもなあ、それなりに理由があるんだよ。いじめるやつもいじめられるやつも、それなりに理由があって、お互いに納得してるんだよ。
真弓　でも、主征は納得していない。
崇史　納得してるよな。
主征　え！僕は・・・
崇史　（主征の座っている椅子を蹴る。）
主征　でも・・
崇史　（足を主征の大腿部にのせながら）納得してるよな。
主征　はい・・・。
崇史　納得してるって。
大寛　（立ちながら）でも、そういうのは止めたほうがいいと思う。
貴彦　だったら、お前が俺たちにたかられたいか？
大寛　・・・・・。（座ってしまう。）
貴彦　象の体に、ノミの心臓ってか。
真弓　主征、あんた自分で何とかしなさいよ。
主征　うん・・。（崇史に金を渡す。）
崇史　（真弓に向かって）お前が毎日、これだけ俺たちに小遣いくれるんだったら、いつでも止めてやるぞ。
真弓　・・・・・・。
土井　おい崇史、その金で氷おごってくれよ。
崇史　いいぜ。
貴彦　土井、あんまり高いもの食うなよ。
土井　わかってるよ。
崇史　わはははは・・・。
貴彦　ちょっと委員長、何か言ってやりなさいよ。
土井　（席を立ってどこか行こうとする。）
崇史　委員長！
真弓　助けたければ、自分で助ければいいだろ。
委員長　あんた、何のための委員長よ。
真弓　お前たちが勝手に僕を委員長にしたんだろ。僕は別に警察でも何でもないよ。君は僕に何を望んでるんだよ。
委員長　委員長、興奮するなよ。
崇史　真弓、委員長いじめるのやめなさいよ。
麻希　僕はいじめられてなんかいない。
委員長　でも、泣きそうな顔してるわよ。
零美　僕は泣いてなんかいない。僕は、自分のしたいことだけをしたいんだ。余計なことに僕を引きずり込まないでくれ。
委員長　委員長。
零美　委員長、委員長って、そういう言い方で僕を呼ぶな！
崇史　委員長。
委員長　都合のいいときだけ、委員長って呼ぶな！
麻希　でも、委員長・・・。
委員長　もういい！（自分の席に座り込む。）
真弓　本当、無責任ね。
零美　だったら、責任感の強い真弓、あんたが最後までやればいいじゃない。
真弓　女の私じゃ無理だから、頼んでいるのよ。
零美　都合のいいときだけ女の子ぶりっ子して。
真弓　何よ、その言い方。
麻希　あんたさ、人のおせっかい焼くのはいいけど、かき回すだけかき回しといて、最後にはいつも人に責任を押し付けるじゃない。
零美　いやな性格。そこらへんのおばさんと一緒よ。
真弓　私はそんなんじゃない。
麻希　何にもできないんなら、最初から黙っていれば。
真弓　今の見てあんたたち、何にも思わないの？
麻希零美　関係ないもんね。
真弓　（主征に）あんたって、本当に最低ね。
主征　僕が？
真弓　人がこんなに親切にしてあげてるのに。　あたしがみんなに責められてるのよ。何かあんたも言ったらどう？
麻希　ほら、今度は主征に責任を押し付けてる。
真弓　何よ！
大寛　（立って）いや、それはそうじゃなくて。真弓も真弓だけど、麻希と零美もこういう問題に対して・・・。
麻希　それで、どうしたいの？
大寛　いや、僕は・・・。
主征　大寛君、黙っていたほうがいいよ。
大寛　僕は言っちゃだめなのか。
水谷　どうせ、何もできないから。
大寛　大寛、座ってたほうがいいよ。
大寛　・・・うん・・・。（座る。）

真弓　あーやだやだ、こんなクラス。
麻里　みんな、もうけんかは止めようよ。
麻希　えっ、何？
麻里　だから、けんかは止めようよ。
麻希　何か言った？
麻里　けんかは止めようよ。
麻希　全然聞こえない。
零美　麻里、あんたの言ってること、誰も聞いてないよ。
麻里　ええ、でも・・。
零美　ええ、でも・・。
零美　權ちゃん。あんた何か聞こえた？
權田　・・・・・・。
零美　ほら、權ちゃんも聞こえないって。
麻里　私は、あなたたちに言ったのよ。
麻希　えー。權ちゃん、麻里があんたのこと、無茶苦茶嫌いだって。
零美　ひどい、麻里ったらそんなこと言うんだ。
麻里　私、そんなこと言ってない。
真弓　いいかげんにしなさいよ、あんたたち。
麻希　えっ？　權ちゃん、真弓があんたのこと、うっとうしくて汚いって。
真弓　どうして、そうなるのよ。
麻希　權ちゃん權ちゃん、二人とも權ちゃんのこと大嫌いだって。
零美　權ちゃんかわいそう。
麻希　あ、私たちが、友達になってあげようか。確かに權ちゃんって暗いし不潔だし不細工だし、真弓や麻里がああいうのも無理ないけど、あたし達やさしいし、權ちゃんがかわいそうだし。權ちゃんがどうしてもって言うなら、あたしたちが友達になってあげるよ。　（豹変して）ほら、頼みなさいよ。　何？あたし達のこと無視するの？
零美　やっぱり權ちゃんって性格悪い。
麻希　そういう人って、一生一人だよね。
真弓　あんた達のほうが性格悪いじゃない。
零美　何で？
零美　よくそこまで言えるわね。
真弓　あんた達だって、影でしょっちゅう言ってるじゃない。
零美　面と向かってはっきり言ってるか言わないか、それだけの違いでしょ。それとも何。そんなに權ちゃんのこと思ってるんなら、普段から友達として仲良くしてる？

麻里　私は別に普通に・・・・。
麻希　私は別に普通に何もしていなければ、友達っていうこと。いい友達。何もしていない、いい友達。最高。
真弓　權ちゃん、何か言ってやりなさいよ。
權田　私は・・、別に・・・。
麻里　もうけんかは止めようよ。ねえ大寛君、何か言って。
大寛　僕が何を言っても、誰も聞いてくれないから。
真弓　麻里、大寛に頼んでも無駄よ。
麻里　でも・・・。
真弓　權ちゃん、あんた自分のことなのよ。自分のこと言われてるのよ。
權田　そんなこと言われても・・・。
真弓　はっきりしなさいよ。
土井　怖いなあ、女の戦いって。
崇史　委員長。何とかしてやれよ、この女達。
委員長　うるさい！
零美　何よ、この女達って。
麻希　ひどいよね。
真弓　主征、あんたのせいよ。
主征　えっ、僕？
真弓　あんたが崇史たちに、毎日お金をたかられていなければ、權ちゃんがこんな風に、みんなに責められることはなかったのに。
崇史　そうだよなあ。すべての原因は、主征、お前が始まりだよ。
貴彦　真弓の言うとおりだ。女を怒らしたら怖いからなあ。
土井　ここはひとつ、權田に謝らなくちゃ。
真弓　そうよ。
麻希　ほうら、また真弓の責任転嫁。
真弓　うるさいわね。
崇史　主征、權田に謝れよ。
主征　何で僕が謝らなくちゃいけないの？
崇史　權田に悪いと思わないのか？
主征　僕のせい？
崇史　そうだよ。
貴彦　決まってるじゃないか。
土井　早く謝ったほうがいいよ。
崇史　主征、謝れよ。
主征　（權田の前に行き）權田さん、ごめんなさい。

権田　私・・・、あんたに謝られるようなこと・・・、何もない。
麻希　主征の気持ちよ、気持ち。
権田　そんな気持ち、わからない・・・。
崇史　権田、主征はお前に惚れてるから、謝ったんだよ。
土井　え！主征、権田のこと好きだったの？
貴彦　全然気が付かなかったなあ。
零美　そういえば、二人なんとなく似てるわね。
麻希　似たもの同士ってこと。
崇史　お似合いなんだ、この二人。
貴彦　主征、まだ権田に打ち明けてないだろ。
零美　女はいつでも愛を待っているものよ。
土井　恥ずかしかったのかなあ。
崇史　だったら早くいえよ。いつでも手伝ってやるよ。
麻希　何、今から愛の告白が始まるの？
崇史　よし、みんなで協力してやろうぜ！
貴彦麻希他　うん！

・崇史、貴彦、麻希、零美の四人が、主征と権田を舞台中央で対面させる。四人は主征と権田を操り人形のように扱う。

崇史　権田さん、あなたのことが昔から好きでした。
麻希　え、私もあなたの暗い性格が好きよ。
貴彦　僕はあなたの陰惨な顔に引かれます。
零美　私もあなたの何でも言うことを聞くところがたまらないわ。
崇史　僕達、お互いにそっくりな子供を作りましょうね。
麻希　世界中、根暗な人間だらけにしましょうね。
崇史　この世の果てまで、地獄です。
四人　ぎゃはははは・・・・。
主征　やめてくれよ。（崇史と貴彦を振り払い、床に四つんばいになる）
麻希　どうしたの、主征。
貴彦　今度は土下座して結婚でも頼むのか？
零美　權ちゃんも相当惚れられたみたいね。
崇史　主征、すがり付いて頼めよ。
主征　（崇史に蹴られ、權田にすがりつく格好になる）
麻希　すがる愛って美しいね。

崇史　權田。ここまでされてるんだから、何とか言ってやれよ。
權田　・・・主征君。・・・あんたを見てると・・・吐き気がする。

・權田は、主征を振り払って自分の席へと行ってしまう。

主征　權田さん・・・。
崇史　吐き気がするってよ。
麻希　權ちゃんにまで嫌われたら、おしまいね。
崇史　お前のせいで、皆にゲロ吐かれちゃたまんねえな。（主征を蹴る。）

・崇史に蹴られたはずみで、主征のポケットからカッターナイフが床にこぼれ落ちる

貴彦　（主征の髪を掴み上げながら）何とか言ったらどうなんだ。
崇史　（カッターナイフに気づき）お、何だよ、これ。（カッターナイフを拾って）これ、お前のか？
主征　うん・・。
貴彦　こういうものを学校に持ってきちゃ、駄目だろ。
崇史　人を傷つけたら、どうするの。
主征　いや・・そういうつもりじゃなくて・・。
崇史　じゃあ、どういうつもりだよ。
主征　どういうつもりって？
崇史　こんなつもりか？　ほれ。（カッターナイフで主征を切る真似。）
主征　ぎゃあ！！
崇史　バカ、刃が裏側だよ。
土井　ものすごい恐がりでやんの。
麻里　崇史君、そういう危ないこと止めようよ。
崇史　危ないから、こいつに教えてやってんだよ。
大寛　君がやってることの方が、危ないよ。
崇史　身をもって教えてるだけだ。なあ、主征。
麻里　止めなさいよ。主征君をいつもいつもいじめるのは。
真弓　何で彼ばっかりいじめるの？
崇史　いじめてねえよ、遊んでるだけだよ。

麻里　もうやめなさいよ。
崇史　だったらよ、麻里。お前が俺達と遊んでくれよ。（麻里の髪をつかみ、カッターナイフで何回も切る。）ほれ、シャカシャカシャカシャカ。あはははは。
麻里　（泣いて逃げる。）
大寛　カッターは危ないから、止めようよ。
崇史　正しい使い方のお勉強だよ。
大寛　人に刃を向けるのは、危ないよ。
崇史　危ないか？（大寛にカッターナイフを近づける。）
大寛　ひゃあ！（自分に向けられたカッターナイフを払う。）

・カッターナイフが、床に落ちる。

崇史　何するんだよ、お前。
土井　大寛。お前の方がよっぽど危ないじゃないか。
貴彦　突然そんなことをして、誰かが怪我したらどうするんだ。
大寛　ごめん。
崇史　じゃあ拾えよ。
大寛　（拾おうとした手を、崇史に踏まれ）痛い痛い・・。
崇史　痛い？
大寛　うん。
崇史　あんまり口ばっかり出してると、お前も痛い目を見るぞ。
貴彦　お前、わかってるのか？　何とか言ったらどうなんだ。
大寛　ごめんなさい・・。

・貴彦と土井が大寛の体を押さえている。

崇史　大寛、そんなに大きくちゃ、体がしんどいだろ。
大寛　・・違う、違う・・・。
崇史　せっかくこのカッターナイフがあるんだから、有効に使わなきゃな。
貴彦　有効に使うってよ。
崇史　肉、削り落としてやるよ。　さあ、どこから削ってやろうかな。腹か？　顔か？（大寛に近寄ってゆく）
大寛　いやだ・・、いやだ・・（たまりかねて貴彦と土井から力ずくで逃れ、椅子を振り上げる。）いやだー！
崇史　何だよ、お前。その椅子で俺を殴るのか？　そしたら俺はお前を絶対に刺すぞ。これるもんならこい。
麻里　大寛君、止めて。（大寛を体で止めようとする。）
大寛　でも・・でも・・。
麻里　あんたまでそんなことしちゃ駄目。
大寛　（椅子を振り上げたまま、泣いてしまう。）
崇史　バカ野郎！　こいつ図体がでかいだけで、何にもできないぞ。　いつでもやってやるぞ。　ほら、こいよ。

・主征が崇史のカッターナイフを持つ手をつかむ。

崇史　何だよ、主征。
主征　崇史君、止めなよ。
崇史　でしゃばるな！
主征　もう止めようよ。
崇史　放せ、主征！

・主征と崇史、組み合いになるが、やがて主征がカッターナイフを持つ崇史の手を自分の首へ持ってゆき、笑いながら自分の首を切り、倒れていく。

全員　（悲鳴とともにストップモーション。）

・先生と千紘にスポットライトが、水谷にはピンスポットライトが当たっている。舞台上は、元の教室へと場面転換を行う。

千紘　水谷君。何で誰もそのことを言わないのよ。
水谷　ちょうど、この位置に立っていたのは、僕だけだったから。主征の笑った顔が見えたのは、この位置にいた、僕だけだから・・・。
先生　他は、誰も見ていないってことか。
水谷　あの満足そうに笑っていた、身も凍るような表情に、僕は足がすくんでしまいました。
千紘　あんたしか知らないことを、どうして先生に言わなかったのよ。あんた最初、何も見ていないって言ったじゃない！
水谷　言える訳無いじゃない。みんなの言い分を聞いてりゃ、わかるだろ。あいつら、黙っていようが自分の主張をしようが、所詮、自分にとって都合のいいこと、創り上げ

千紘　るやつらじゃないか。
水谷　でも、麻里が言っていることは、あなたの話に一番近いわ。
千紘　でも、あいつも創ってるんだよ。人に嫌われたくないから。
水谷　じゃああんたの言葉を借りると、みんな、人の心を失った、鬼のような人間だというの。
水谷　ああ、鬼かもしれない。そして俺も、そうなのかもしれない。
千紘　だったら、みんなの話は全て嘘で、傷ついた主征までもが、嘘をついていたということね。
水谷　あいつら、みんな嘘つきだ。誰一人として、本当のことを言える奴はいない。
先生　水谷、お前の言っていることは、信用していいんだよな。
水谷　先生、さっき言ったでしょ。みんなと同じように、鬼かもしれないこの僕を、信じてくれるんですか？
先生　水谷・・。
水谷　失礼します。

・水谷は教室を出て行ってしまう。スポットライトの中で見送る先生と千紘。

千紘　先生・・。
先生　一体どうなっているんだ。誰のいう言葉を信じればいいんだ。主征が最初に言っていたのは、チャンバラでけがをしたということだったんだぞ。
千紘　主征は、本当のことを言えばいいはずなんです。すべて明るみに出し、今までのことを先生に訴える絶好の機会だったと思います。
先生　普通はそうだ。
千紘　それとも主征は、もっと別のことを計算していたんでしょうか？
先生　何？
千紘　自分が崇史を責めないで、弁護してやることによって、真実を隠し混乱を起こさせようとした。
先生　主征が崇史を庇えば庇うほど、みんなは自分の立場に不安を感じるということか。
千紘　そしてみんなは自分を守るために、自分に都合のいいように事の次第を説明していく。でもそれは、作り事であるがゆえに、更なる嘘を引き起こし、お互いがお互いをけなし合い、最後には崇史一人を悪者にしなければならなかったのだと思います。
先生　そして崇史は、学校を辞めると言い出した。事は主征の思った通りに進んだということか。
千紘　先生、これはやっぱり事故じゃなくて、主征が・・・。
先生　違う、これは事故だ。事故なんだ。事故じゃなくちゃいけないんだ！
千紘　でも、それじゃあ、どうして・・・・。
先生　今となっては、全て藪の中。何があったにせよ、これからも、永久に本当のことはわからないだろう。事故として処理をしなければ、あいつらはもっと人の心を失って、鬼になっていくのかもしれない。
千紘　じゃあ、誰がそれを止められるんですか。
先生　それはわからない。ただ言えることは、あいつらが人として生きていくのか、鬼と化して生きていくのか、それは羅刹の門の前に立っている、あいつら自身が決めることだ。
千紘　先生。
先生　一体あいつらは・・・、あいつらは、どうなっていくんだ！

・少し前から生徒達が、無言のまま教室内に入り、物のように立っている。

生徒達　（振り返り）先生。あははははは・・・・。

・生徒達の不気味な笑い声の中、幕が降りてゆく。

――幕――